

vol.52

## 詩人を敬え

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

「私は詩人です」と自己申告する人はかなり怪しまれることを覚悟しなければならぬ。日本では詩だけで生活していけるのは一人か二人に限られるという話もある。だが、ロシアでもヨーロッパでもアメリカでも、詩人はそれなりに敬意を払われる存在である。私の古い友人は奨学金や文化交流プログラムを探し出してくるのが得意で、しばしば顎足付きで外国の都市に滞在し、生活費を浮かせていた。詩人として厚遇され、現地の女性と良好な関係を築いたりしていたのだが、いざ日本に帰ると、貧乏で無名という現実が待っていて、せっかく知り合った女性にも愛想を尽かされてしまう。

かつて詩人は神の声を伝えたり、現実を超越したり、独特のオーラを放つたり、怪しい魅力を振り撒いたりする存在だったが、いつしかその存在価値が不当に貶められてしまった。

資本主義は確実にコトバを墮落させる。詩人ほど資本主義と相容れない存在はいない。極言すれば、資本主義の世の中で最もよく活用されているコトバといえば、商品広告ということになるのかもしれない。資本主義は何でもカネにするという思想であり、宗教であるから、ツールとしてのコトバをどう使えば金になるかを突き詰めることになる。その結果、商品価値を高めるとか消費者の購買意欲をそそるためにコトバを弄する方向に向かう。アメリカの商品広告の手法を政治に応用したのが、ナチスの宣伝相ゲッベルスである。単純なスローガンを反復し、危機感を煽り、人種差別や戦争を正当化するように功利主義的、合目的にコトバを活用した。

すぐにお金になるような詩があるとすれば、それはもはや詩ではなく、限りなく商品広告に近い。そもそも「詩は何の役に立つのか」という有益性を問うこと自体、資本の原理に毒されているのであって、それに完全に背を向ける態度にこそ詩人の栄光は輝くのである。「食えない」ということを目指さなければならぬわけだから、なかなか辛い商売ではある。せめて、彼らを敬えといいたい。

### Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授